

臨床実地問題 50 問(解答時間 2 時間)

1 眼球の組織像を別図 1 に示す。

誤っているのはどれか。

- a ①のターンオーバーは約 1 週間である。 b ②は細胞の基底膜である。
c ③は約 200 層の薄葉からなる。 d ④の主成分はⅣ型、Ⅷ型コラーゲンである。
e ⑤は神経堤細胞由来である。

2 52 歳の男性。2 か月前から両眼の霧視と眼瞼腫脹を自覚して来院した。矯正視力は右 0.8, 左 0.7。眼圧は両眼ともに 38 mmHg。両涙腺部に腫瘤を触れる。隅角鏡写真と涙腺生検の病理組織像を別図 2A, 2B に示す。診断はどれか。

- a 涙腺多形腺腫 b 涙腺腺様嚢胞腫 c MALT リンパ腫
d IgG4関連眼疾患 e サルコイドーシス

3 眼球の組織像を別図 3A に示す。

この細胞は別図 3B のどこに存在するか。

- a ① b ② c ③ d ④ e ⑤

4 生後 3 か月の乳児。在胎 35 週 3 日, 出生時体重 2,600 g。右眼の視線が合わず, 顔写真で右眼瞳孔が白く写ったため来院した。全身と家族歴に特記すべきことはない。前眼部写真と超音波 B モード断層像を別図 4 に示す。

診断はどれか。

- a Coats 病 b 発達白内障 c 網膜芽細胞腫
d 第 1 次硝子体過形成遺残 e 家族性滲出性硝子体網膜症

5 55 歳の男性。数年前から進行する両眼の視力低下で来院した。矯正視力は右 0.5, 左 0.3。両眼の眼底写真と OCT 像および多局所 ERG の結果を別図 5A, 5B, 5C に示す。

この患者にみられるのはどれか。2 つ選べ。

- a 夜盲 b 中心暗点 c 求心性視野狭窄
d 全視野刺激 ERG 正常 e フルオレセイン蛍光眼底造影検査で黄斑部低蛍光

6 28 歳の女性。数日前からの右眼の視力低下で来院した。矯正視力は右 0.2, 左 1.0。右眼眼底に異常を認める。左眼に異常はない。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 6A, 6B, 6C に示す。

診断はどれか。

- a 後部強膜炎 b Vogt-小柳-原田病 c 多発消失性白点症候群
d 多発性後極部網膜色素上皮症 e 急性後部多発性斑状色素上皮症

7 40 歳の女性。10 年前から結膜の腫瘤に気付いていたが放置していた。最近, 腫瘤が徐々に増大したため来院した。両眼の前眼部写真と結膜腫瘤の生検による病理組織像を別図 7A, 7B に示す。

診断はどれか。

- a 眼窩蜂巣炎 b 結膜血管腫 c 多発性骨髄腫
d MALT リンパ腫 e 結膜アミロイドーシス

8 62 歳の男性。網膜剝離で網膜復位術を受けて 5 日間入院した。職業は会社員で年収 600 万円。診療点数早見表を別図 8 に示す。

高額療養費制度を用いた時の自己負担額はいくらか。

- a 約 10,000 円 b 約 40,000 円 c 約 80,000 円 d 約 150,000 円 e 約 500,000 円

17 25 歳の女性。頻回交換ソフトコンタクトレンズを使用していたが、水道水で洗浄したり、2 週間以上使用していた。3 日前からの左眼の充血と昨日からの眼痛で来院した。疼痛で開眼困難である。前眼部写真を別図 17 に示す。

適切な治療はどれか。

- a 抗菌薬点眼 b 人工涙液点眼 c アシクロビル眼軟膏点入
d 副腎皮質ステロイド点眼 e クロロヘキシジングルコン酸塩点眼

18 60 歳の男性。左右の瞳孔の形が違うことに気付き来院した。矯正視力は両眼ともに 1.2。眼圧は右 14 mmHg、左 17 mmHg。両眼の前眼部写真と角膜内皮スペキュラマイクロスコープ写真を別図 18A、18B に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 男性に多い。 b 心奇形を伴う。 c 両眼性が多い。
d 虹彩異常は進行性である。 e 頸動脈エコーが診断に有用である。

19 眼表面のフルオレセイン染色時に得られた点状表層角膜症の染色パターンを別図 19 に示す。

正しい組合せはどれか。2 つ選べ。

- a ①———重症涙液減少型ドライアイ
b ②———春季カタル
c ③———Meibom 腺機能不全
d ④———薬剤性角膜上皮障害
e ⑤———神経麻痺性角膜症

20 53 歳の男性。右眼の変視を訴えて来院した。視力は右 0.3(0.4× +0.50 D ⊂ cyl -0.75 D Ax 180°)。高血圧、糖尿病の既往はない。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真の早期像および OCT 像を別図 20A、20B に示す。左眼眼底に異常はない。

診断はどれか。

- a 典型加齢黄斑変性 b 網膜血管腫状増殖 c 網膜静脈分枝閉塞症
d 黄斑部毛細血管拡張症 e ポリープ状脈絡膜血管症

21 65 歳の男性。約 1 か月前からの右眼視力低下と中心暗点を主訴に来院した。矯正視力は右 0.8。眼底写真、OCT 像、フルオレセイン蛍光眼底造影写真、インドシアニングリーン蛍光眼底造影写真を別図 21 に示す。高血圧の既往がある。

診断はどれか。

- a 網膜細動脈瘤 b 網膜色素線条 c 典型加齢黄斑変性
d 網膜血管腫状増殖 e ポリープ状脈絡膜血管症

22 29 歳の女性。右眼の突然の視野欠損と光視症を訴えて来院した。右眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 22A、22B、22C に示す。

診断に有用な検査はどれか。2 つ選べ。

- a 視野検査 b 多局所 ERG c VEP d 頭部 CT e 頭部造影 MRI

23 42 歳の女性。最近左眼の歪視を自覚して来院した。左眼眼底写真とフルオレセイン蛍光眼底造影写真および OCT 像を別図 23A、23B に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a 脈絡膜骨腫 b 脈絡膜母斑 c 脈絡膜血管腫 d 脈絡膜黒色腫 e 脈絡膜転移性腫瘍

31 4歳の男児。2か月前から時々眼が寄ると母親が訴えて来院した。アトロピン硫酸塩水和物点眼後の屈折値をもとに眼鏡を作製し、装用開始後9か月の視力は右(1.2×+4.00 D)、左(1.2×+3.75 D)。遠見と近見で斜視角に差はなく、AC/A比も正常である。裸眼時と眼鏡装用時の眼位写真を別図31に示す。

今後の対応で正しいのはどれか。

- a 経過観察 b 右眼遮閉 c 二重焦点眼鏡処方 d ボツリヌス毒素治療 e 斜視手術

32 10歳の男児。石原色覚検査表で異常を指摘されて来院した。パネルD-15テストとアノマロスコプの結果を別図32A, 32Bに示す。

判定はどれか。

- a 正常 b 1型3色覚 弱度 c 2型3色覚 弱度 d 3型3色覚 弱度 e 判定不能

33 43歳の女性。左眼の視力低下を主訴に来院した。視力は右1.0(矯正不能)、左0.06(矯正不能)。左眼に相対的瞳孔求心路障害(RAPD)陽性。両眼の眼底写真と眼位写真を別図33A, 33Bに示す。

障害部位はどれか。

- a 網膜 b 視神経 c 眼窩先端部 d 海綿静脈洞 e 中脳

34 8歳の男児。学校健診で視力低下を指摘され、近医で眼底異常を疑われ紹介されて来院した。視力は右0.3(1.0×-0.75 D)、左0.4(1.0×-0.75 D)。眼位は正位。眼球運動に異常はない。側方視時に眼振を認める。両眼の眼底写真と頭部MRI画像を別図34A, 34Bに示す。

診断はどれか。

- a 視神経炎 b うっ血乳頭 c 視神経網膜炎 d 乳頭ドルーゼン e Leber 遺伝性視神経症

35 43歳の女性。進行する視力低下を主訴に来院した。視力は右0.02(矯正不能)、左手動弁(矯正不能)。眼位写真と9方向眼位写真および両眼の眼底写真を別図35A, 35B, 35Cに示す。

正しいのはどれか。

- a 胸腺腫大 b 拡張型心筋症
c 抗GQ1b抗体陽性 d ミトコンドリア遺伝子欠失
e エドロホニウム塩化物静注試験(テンシロンテスト)陽性

36 50歳の男性。片眼に眼圧上昇を繰り返すため紹介されて来院した。細隙灯顕微鏡写真を別図36に示す。

前房水検査で検出されるのはどれか。

- a サイトメガロウイルス b 単純ヘルペスウイルス c 水痘帯状疱疹ウイルス
d アカントアメーバ e カンジダ

37 25歳の男性。右眼に野球ボールが当たり、視野障害を来したため来院した。矯正視力は両眼ともに1.0。眼圧は両眼ともに12 mmHg。右眼角膜、結膜に損傷はない。右眼眼底写真を別図37に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察 b 抗菌薬硝子体内注射 c 前房洗浄 d 強膜内陥術 e 硝子体手術

38 10歳の男児。工作の時間に彫刻刀で左眼を突いた。強角膜裂傷と水晶体損傷および網膜剝離を生じたため、緊急手術を行い、シリコンオイルタンポナーデを施行した。左眼前眼部写真と広角眼底写真およびOCT像を別図38A, 38B, 38Cに示す。

黄斑部の所見で正しいのはどれか。

- a 網膜浮腫 b 網膜皺襞 c 網膜下異物 d 網膜下出血 e 漿液性網膜剝離

